九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

景氣變動の必然性

波多野，鼎

https://doi.org/10.15017/4151125

出版情報：經濟學研究. 6 (1), pp.1-46, 1936-03-31. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

景氣變動の必然性

波多野鼎

一

グスタフ・カツセル（Gustav Cassel）は景氣變動研究の方針として次のやうに言つてゐる。――『變化恒なき景氣の下に時ける經濟生活の變動を研究するに際して、吾々は能ふかぎり具體的なものから抽象的なるものに進まうと思ふ。即ち吾々は第一に物質的生産の變化、及びそれと關聯してゐる生産手段に關する變化、を考察するであらう。次いで吾々は順次に價格形成及び所得形成上の變化の考察に移り、そして最後に資本市場の狀況における變化に到達するであらう。吾々は可能なるかぎり一歩々々と事實上の過程を統計的に確め、それに基いて各種の變動線の交互作用を明かにし、以て內部的な關聯を說明するにつとめるであらう。[1]』

こゝでカツセルが述べてゐる事柄の第一、即ち具體的對象から抽象的對象へ分析の歩を進めるといふこと、これについては恐らく異論はないであらう。ヨリ具體的な『物質的生産』の部面から、ヨリ抽象的な『資本市場』（信用部面）へ考察を進めることは正道である。それと逆の方針は事態を錯倒的に認識

1）Gustav Cassel, Theoretische Sozialökonomie, 4 Aufl. S. 473.

させるに終るであらうからだ。然し彼が述べてゐる第二の事柄、即ち經驗的・統計的なるものゝ考察から、抽象的・理論的なるものゝ確立へといふことは正しくない。けだし經驗的・統計的なるものゝ確立そのことがすでに一定の理論を前提とすることであり、またかゝるものゝ理解乃至意味づけは一定の理論なくしては不可能事であるからだ。――然し私がこゝに力說したいのは、これ等の點に關してゞはない。彼の言ふ『具體的なるもの』『抽象的なるもの』及び彼が統計的に確めやうとする『事實上の過程』なるもの、これ等凡てが變動しつゝあるものとして把へられてゐるといふ點である。換言すれば、『經濟生活における變動』を與へられたるものとして前提し、その前提に立脚して右の二方針に從ひつゝこの變動を貫く法則を確立せんとしてゐるといふ點である。このことは彼の行論の跡を見れば明確疑を容れないが、右の一節からでも充分看取し得るところである。要するにカツセルは『經濟生活における變動』の必然性、即ち景氣變動の必然性を問題とはしないのである。

かゝる態度は必ずしもカツセルにのみ特有の態度でないことは周知の通り。吾々はツガン・バラノフスキー（Tugan-Baranowsky）において、シュピートホーフ（Spiethoff）において、その他それ等の流を汲む所謂經驗的・實證的景氣理論家において、更にまた、ハーバード景氣研究所、ベルリン景氣研究所を中心とする所謂經濟學上の天氣豫報學派において、かゝる態度の明確なる表現を見得るのである。

カツセルによつて代表せられる景氣變動の必然性を論外に置く態度に對して、嚴密に理論的たらんと

志す一群の學者——例へばシュムペーター（Schumpeter）レーデラー（Lederer）ケインズ（Keynes）ハイエーク（Hayek）等々——は、景氣變動の必然性の問題の解決を第一の課題としてゐる。これ等の學者たちはその際經濟生活における『均衡』の想定から出發するのである。變動の必然性を論證するためには無變動の狀態の想定から出發せねばならぬとするのである。尤も想定されたる『均衡』狀態の內容そのものについては、また如何なる要因がかゝる均衡を攪亂し、變動を惹起する要因であるかについては、諸學者の見るところに大いなる相違がある。それ等の點に立入つて論及することはこゝでの問題ではない。それは私がすでに他の機會において學說批判の形において試みたところである。もちろん以下の行論の必要上關說することはあるであらうが。

私もまたこれ等の所謂均衡論的景氣理論家たちと同樣に、景氣理論の第一の課題は、景氣變動の必然性を論證するにある、といふ立場をとる。本論文はその論證に關する一つの試論である。

二

論を進めるに先立つて景氣概念についての私の見解を明かにしておきたい。

こゝに言ふ『景氣』は Konjunktur, conjuncture に當る。これの親緣的な概念として或は『產業循環』（Trade Cycle, Business Cycle）或は『產業變動』（Industrial Fluctuation）等の概念が用ひられた

り、或はまた『經濟生活の波動運動』(Wellenbewegung des Wirtschaftslebens) 或は『躍進と沈滯との交替狀態』(Wechsellagen von Aufschwung und Stockung) 等の諸概念がある。すでにこれ等の諸概念からでも、『景氣』なるものが、第一に資本主義的經濟に關はつてゐるものであること、第二にそれは資本主義經濟の活動樣式に關はるゝものであること、第三に周期性といふ屬性が不可缺なものであることは明かである。これらの諸點を明かにすることによつて景氣概念を確めやう。

第一、景氣は資本主義的經濟に關はれるものであること、資本主義經濟を離れては景氣は考へ得られないこと、即ち前資本主義的な自然經濟及び獨立生產者の經濟には景氣現象は存在しなかつたこと、このことは往々見落され兼ちな事實であるが、然しそれが見落されるのは生物の生長にとりては太陽の熱と光線とが必要であるといふ事實が看過されることがあるのと同じやうな意味においてゞあると考へられる。したがつてこのことはたゞ指摘するに止めておいてよからう。

第二、資本主義經濟は常に一樣なる活動狀態を示すものではない。恰かも海潮に干滿の動きがあるやうに、その活動は時に極めて旺盛となり、時には急激に萎縮し、時には平靜に歸る。然かもかやうな活動態樣を循環的に表はしてゐる。資本主義經濟が循環的に表はすかゝる活動態樣の總體を名付けて吾々は『景氣』と呼ぶのである。即ち景氣概念において中心的なる事實は經濟活動の態樣であり、その態樣の如何にしたがつて景氣に樣々の『局面』が區別されるのであるが、その活動態樣の本質的なメルクマ

ールは何であらうか。これが次の問題である。かゝるものとして人は商品の販賣高を、或は株式價格を或は商品價格を、或は所得を考へる。かゝるものが、それぞれの意味を有つものであることは言ふまでもないが、然し本質的なメルクマールではあり得ないと私は思ふ。本質的なメルクマールが何であるかは、資本主義經濟における基礎的事實は何であるかを考へることによつてのみ明かにされ得るであらう。然しこのことをこゝに詳論する暇はない。たゞ次のことを指摘するのみで滿足せねばならぬ。即ち——資本主義經濟の本質は價値の增殖にある。然して價値の增殖における基礎的事實は、商品の生産である。そしてその他のあらゆる經濟的事象、例へば商品の取引量、その價格、所得、利子、株式價格等々は、商品の生産を中心として旋回する、その變動に照應的なる變動をする。例へば商品の生産が旺盛となれば、取引量は增大する、價格は騰貴する、所得は增加し、利子率は高まり、株式價格は騰貴する。また商品の生産が不活潑となれば、右と逆の運動が生れる。だから吾々は、經濟の活動態樣の本質的メルクマールを生産活動の態樣に求め、それが旺盛であるか否かによつて、景氣に樣々の局面を區別せねばならぬ。然しこゝに注意を要する一事がある。それは商品取引量、價格、所得、利子率、株式價格等々は生産と照應的な動きをするといふも、このことは、それ等が一樣に、且つまた生産に比例的に變動するといふ意味ではないことこれである。例へば生産の增大は同じ率の價格の騰貴を齎らすものではない、のみなならずこれはやがて價格を下落せしめる機因として働く。また商品價格騰貴の率は、勞働

所得增加の率と必ずしも等しくはあり得ない。かくの如く經濟的諸事象の運動が不齊一であるといふこと、このことこそ正に景氣に循環性を、その周期性を與へるところの要因なのである。

第三、景氣は周期性或は循環性を有つといふこと、これは景氣の諸局面が一定の期間を置いて循環的に現はれるといふことである。これは景氣の一局面としての恐慌に關はつて多くの學者の論じたところである。例へば恐慌局面は十年乃至十二年、或は六年乃至八年の期間を置いて循環的に現はれるとか、或はヴオルフ（Wolff）パルブス（Parvus）コンドラチエフ（Kondratieff）などはもつと長期の、例へば五十年を一循環とする、波動があることを主張してゐるといふ風に。然し乍ら期間の長さが幾許であるかの點は、周期性の問題にとつて根本的な點ではない。重要なのは景氣の諸局面が周期的に一定の規則性を以て表はれるといふことそのことのみである。然し乍らこゝでも注意すべき點は、周期的に現はるゝ景氣或はその諸局面が、それに先行する景氣或はその諸局面と同一の意味と內容とを有つものではないといふ點である。このことは、資本主義經濟は一系列の景氣局面を通過する間に自己生長を遂げる、即ち資本主義經濟の基礎的事實である生產機構が景氣の過程中において構成上の變化を遂げ、それに照應して流通、信用の諸機構もまた變化することから、當然に生れ出る歸結である。この意味で『景氣』は資本主義經濟の發展形式であると呼んでよい。

最後に類型的なる景氣の諸局面について、また各局面を特徵づける諸現象について一言しておかう。

景氣の諸局面を如何に分つか、何を各局面の特徴的現象と見るかは、人々の有つ景氣理論の異るにしたがつて異らざるを得ない。いろ〳〵の見解があるが、こゝでは一々論及することをしない。單に私の見解を表示的に示すに止めやう。この表示の根底にある私の景氣理論そのものは、叙述の進行に伴ふてこれを明かにするの他はない。

景氣の諸局面とその特徴的諸事象

	生産部面	流通部面	信用部面
不景氣（沈滯）	生産の一般的萎縮。多數失業者の存在。	商品價格は一般に低位で保合。	金融緩漫。低利子率。證券價格も低位保合。資本發行の萎縮。
恢復（上昇）	生産財及び耐久的消費財の生産部門の活況開始。	生産財價格の上昇。手形流通高の增加。	利子率の上向。證券價格の躍進。資本發行の增加。
好景氣（繁榮）	消費財生産部門の活況開始。就業勞働者の增加。生産財生産部門の擴大の停滯。	消費財價格の上昇。流通通貨の增加。生産財ストックの增加。	利子率の高騰。（金融逼迫）。證券價格の上進停滯。資本發行增加の停止。

恐慌			
生産一般の急激なる收縮。工場閉鎖。失業者の激增。産業資本の破壞。（生産恐慌）。	手形流通高の減減。貨幣の退藏。强制販賣。價格の一般的暴落。（商品恐慌）。	利子率の暴騰。支拂不能の累積（金融恐慌）。證券價格の暴落（株式恐慌）。	

三

さてかくの如き景氣の循環的變動の必然性は、『均衡』概念を媒介とすることによつてのみ明かにされ得るであらう。

このことはさきに觸れた點である。ところで『均衡』概念そのものについてすでに人々の見解は區々に分れてをり、人によつてこの概念に盛る內容に甚しい相違がある。また景氣理論の構成において均衡概念に與ふる位置について、或は均衡概念の意味づけについて、意見の對立がある。こゝではそれ等に一々觸れる餘裕はないから、直接私自身の見解を述ぶることゝし、若干の代表的なる見解に關說するに止めやう。

まづ均衡概念そのものは如何に規定すべきであらうか。

この問題については次の三點が注意されねばならぬであらう。

第一、吾々が問題とする景氣は資本主義經濟に特有の現象である。かゝるものとしての景氣を理解するための思惟的補助手段としての『均衡』は、したがつて當然に資本主義經濟における均衡でなくてはならぬ。經濟の資本主義性を全然無視した謂はゞ經濟一般における均衡とか、或はまた非資本主義的な自然經濟を前提した均衡といふが如きものは、吾々にとりては無緣のものである。かゝる均衡概念が無益であるのは、恰も近代武器をもつてする戰爭を理解するに弓や矢の概念が無益であるのと同樣であらう。然るに近代の理論家にして均衡概念を自然經濟的に規定するものがある、例へばシュムペーター。シュムペーターは均衡狀態即ち靜態經濟を、そこでは無利潤、無利子の價格が支配する狀態として規定してゐる。[2] 無利潤、無利子の狀態は、資本主義經濟とは凡そ無緣な、自然經濟に他ならぬことは言ふまでもなからう。『企業家』も存在せず、殊に『資本』の存在せざる狀態は、如何にしても資本主義的なるものとは言ひ得ないであらう。

第二、吾々が想定せねばならぬ『均衡』は、資本主義的擴大再生產における均衡である。さきにも一言したやうに、資本主義經濟の本質は、價値の增殖にある。然かも增殖される價値が、そのまゝに終局的に消費されることなく、それが蓄積されて增殖されること、價値を多々益々大ならしめることが、資本主義的經濟の謂はゞ運命である。そしてこのことは言ふまでもなく生產の規模がまゝ〳〵擴大されねばならぬことを意味する。かくの如き運命を擔ふ資本主義經濟の活動態樣としての景氣が問題であり、

2) Schumpeter, Das Wesen und Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie, 1908. S. 386ff. 438ff.

そして均衡概念はかゝるものとしての景氣を理解するための手段に外ならぬのであるから、均衡が擴大再生産における均衡として規定されねばならぬことは、その當然の歸結である。

第三、吾々が想定せねばならぬ『均衡』は資本主義的擴大再生産における一段的均衡でなくてはならぬ。それは部分的均衡であつてはならぬ。例へば商品の供給と需要との關係における均衡（セイ、ミルリカアド等）消費財とその購買力との均衡（シスモンヂ、ロードベルツス、ホブソン、レーデラー等）、單なる生産部門間の均衡（ツガン・バラノフスキー、ヒルフアディング）金と信用量との均衡（ホオトレー）或は貨幣價値と利子率との均衡（フイシヤー）節約と投資との均衡（ケインズ）等々は、勿論それ〴〵の意味を有ち得るものではあるが、充分ではない。これ等の部分的均衡は一般的均衡のそれ〴〵の肢体として、その有機的構成部分として、理解されねばならぬ。換言すれば、一般的均衡は、これ等の部分的均衡を内包しつゝ、ヨリ高き水準において、それ自体として規定されねばならぬ。

以上の三規定こそ吾々が景氣變動の必然性を明かにするにあたつて用ひ得べき均衡概念において逸すべからざる規定であると考へる。かゝる諸規定を有つ均衡概念が具体的には如何なるものであるべきかは、吾々が後に資本主義經濟の基礎的機構を明かにしたる後において、はじめて明確にし得るところである。

四

右に述べた如き根本規定を有つ均衡概念を更に一層詳細に規定するに先立ち、この概念が吾々の景氣理論構成上において占める位置、或はその意味について考へておくことが便宜であらう。

吾々の理論構成においては『均衡』概念は單に手段的或は媒介的意義を有つにすぎぬ。即ち吾々が均衡概念を用ひ、或は一つの均衡を想定することは、かくすることによつて、はじめて不均衡を明確にし得るが爲めである。一本の棒が曲つてゐるかどうかを、またそれが如何に曲つてゐるかを確めるためには、眞直な物指が必要であるやうに、景氣理論においては觀念的な、然しあくまでも資本主義的な、均衡を明かにすることが、その不均衡を、したがつて資本主義的經濟における景氣變動の必然性を、論證するために必要なのである。この場合究局の目的は不均衡を明かにするにあつて、均衡を云爲するのはそのための手段たるにすぎぬ。

このことゝ關聯する點があるが、私の意味する均衡は一つの靜止狀態としての均衡ではない。換言すれば、一つの靜止狀態としての均衡を想定して、それが何等かの力によつて、或はその何等かの與件の變化によつて、破壞せられ、かくて破壞された均衡が、諸々の與件間の相互適應の過程を經て、一つの新たなる靜止狀態としての均衡を形成し來る、この過程が即ち景氣變動である、といふが如き意味において『均衡』を理解するのではない。均衡は吾々の理論においては出發點たるものでもなく、また到達點たるものでもない。

從來の所謂均衡論的景氣理論は、右のやうな意味において均衡概念を用ひて來たものである。例へば正統學派における恐慌問題の取扱方を見やう。即ち彼等は、自由競爭が完全に行はれ、從つて自然價格或は平均利潤率が行はれる狀態、これを一つの均衡狀態として想定し、それが或は生産力の不平等なる分配によつて、或は生産者の誤算によつて、攪亂される狀態を恐慌として考へ、然して恐慌は資本及び勞働の移動によつて、生産の編成替へが行はれる間のみ存在する現象として說いたのである。ツガン・バラノフスキー、シュムペーター、降つてはハイエーク等々の理論の建前もこれと同樣である。ただ如何なる狀態を均衡狀態と見るか、また如何なる要因をその攪亂的要因と見るかについて意見の相違があるのみである。例へばツガン・バラノフスキーにあつては生産諸部門間の比例性といふことが均衡の內容であり、攪亂的要素は貸付資本の過不足である。[3] シュムペーターではさきに指摘したやうに費用法則即ち無利潤無利子價格の支配する狀態が均衡狀態であり、攪亂的要因は、新企業家の群的なる出現である。[4] ハイエークにあつては均衡狀態は、消費財に支出される貨幣額と中間生産物に支出される貨幣額との比率が、消費財需要と中間生産物需要との比率に等しく、また同じ期間に生産される消費財と中間生産物との比率に等しい狀態であり、攪亂的要因は、貨幣量の變動——貨幣利子率を均衡利子率から離反させるところの——である。[5] またマルクス主義者ブハーリンにおいても同樣な理論の建前が見られる。即ち彼は發展の過程中にある資本主義制度の均衡は如何にして可能であるかといふ風に問題を提起し、

3) Tugan-Baranowsky. Studien. S. 25fff. S. 243ff.
4) Schumpeter. Entwicklung. S. 335ff.
5) Hayek, Monetary Theory, p. 123ff. 213ff. Preise und Produktion. S. 44.

資本主義的矛盾を排除したところの一つの均衡狀態を確立し、次いで資本主義的矛盾のためにこの均衡が攪亂される狀態を恐慌として論ずるのである。[6]

かやうな均衡論的景氣理論の根本的缺陷は次の點にあると私は考へる。——均衡論的景氣理論は、現實的なるものを觀念的なるものと取代へるものである。現實的なる資本主義經濟は、無矛盾の組織ではなく、不均衡の要素を內包せざる組織ではない。それ故にこそ景氣變動が現實に起るのである。然して景氣理論にとりてはかゝる現實的なる景氣變動の必然性を論證することが問題である以上、資本主義經濟は常にこれを不均衡的體系として把握せねばならぬ。ただ如何なる意味において不均衡的體系であるかを明かにする必要上、均衡といふ觀念的尺度を必要とするにすぎぬのである。この觀念的な尺度に照して資本主義が本來具有する不均衡性を明かにし、同時に景氣變動の論理的必然論を明かにし得るのである。然るに均衡論的景氣理論は、資本主義的經濟を一應無矛盾の體系として、均衡の體系として把握する、したがつてこの體系にとりては不均衡的要素は謂はば外來的要素であり、それに附加され接木されたる要素として現はれる。それ故に景氣變動なるものは、資本主義の內面的機構から必然的に發生するものであるといふ認識が曇らされる。即ち彼等においては、現實の資本主義經濟が時に均衡狀態を示し、時に不均衡狀態を示すものとして理解される。換言すれば常に景氣變動の過程中にあるものとしては理解されないのである。彼等は動いてゐる物體を動いてゐるまゝの姿において直接に理解することが

6) Bucharin. Der Imperialismus. S. 7. S. 57ff.

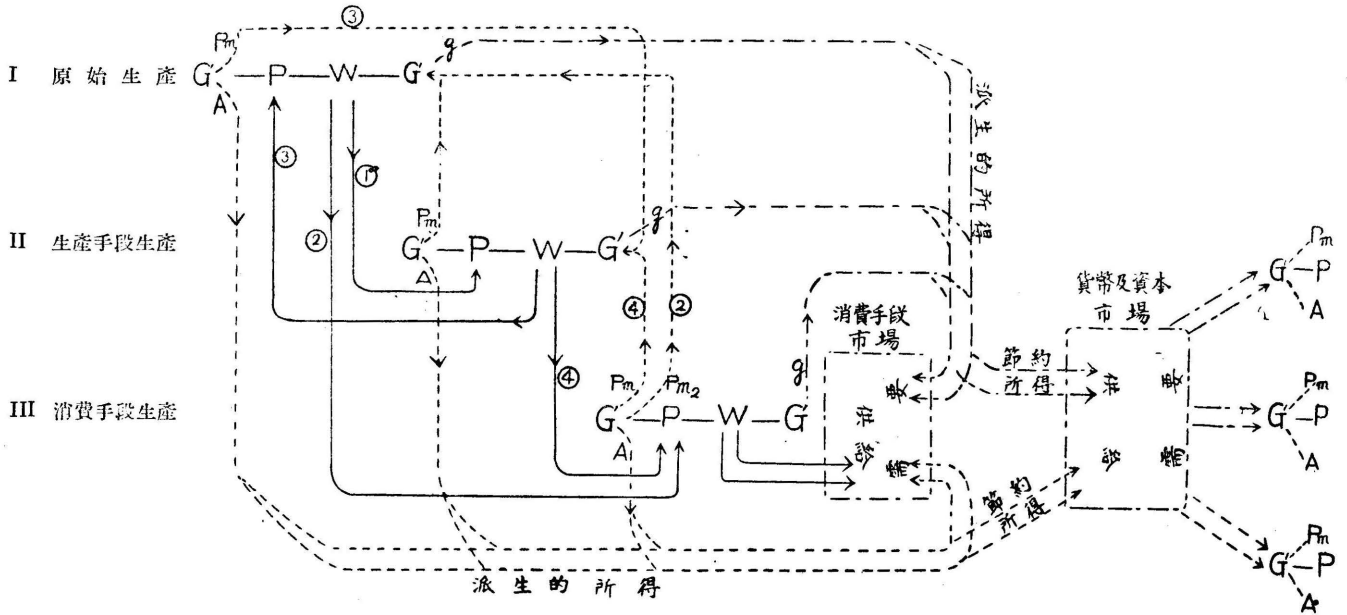
できない、動いてゐる物體を一旦靜止せしめ、然る後これを動かすのであるが、吾々は動ける物體をその動けるまゝの姿において理解しやうとする、そのために靜止せる物體を觀念的なる標準として想定するのである。

五

以上で均衡概念の根本規定及びこれが景氣理論において有つ意義の大要を論じた。そこで次に來る問題は、吾々の均衡概念を更に一層明確に規定することである。然してこれを規定するためには、さきに述べた根本規定に從ふ必要上、吾々はまづ資本主義經濟の基本關係について明確な認識を有たねばならぬ。

私はこゝで資本主義經濟の基本關係を一目瞭然的に表現したものとして、ハンス・マルツエル（Hans Marzel）の圖型を借りやうと思ふ。[7]

7) Marzel, Das Kapitalzinsproblem im Lichte des Kreislauf der Waren und des Geldes, 1927, S 20.



黒線(——)は商品の運動を表はす
その他の凡ての線は貨幣の運動を表はす
勞働所得の流通を表はす (————————)
利潤の流通を表はす (—·—·—·—·—·—)
生産手段に前拂された貨幣の流通を表はす (·····)

右の圖型では社會的生産は三大部門から成るものとせられてゐる。第一部門としての、原始的生産部門は、土地に密着せる生産部門であつて、その代表的なるものとしては有機的産業としての農業、及び無機的産業としての鑛業その他の抽出産業が考へらるべきであらう。こゝでの生産物の一部は生産手段として用ひらるべきものであり、他の一部は消費手段として用ひらるべきものであるが、その後者は直接消費手段市場に現はるゝことなく、消費手段生産部門を通じて現はるゝものとせられてゐる。第二の生産手段生産部門及び第三の消費生産部門については改めていふべきことはない。

右の三大部門の内部にはいふまでもなく、無數の獨立の企業があり、或は相互間に、或は他の部門内の企業と密接な關係に立つてゐる。然し第一の關係即ち各部門内部の企業間の關係はこの圖型には表現されてゐない。部門と部門との關係のみが一括的に表現されてゐる。例へば機械生産者甲が他の機械生産者乙から機械製作用の機械を買ふといふ關係はこゝには表現されてゐない、ただ第一部門及び第三部門が第二部門から機械を買ふ關係がそれ〴〵一括的に表現されてゐるに止まる。――また第一及び第二部門内の各企業が生産した生産手段のうち、各企業によつて使用される部分もまた表はされてはゐない。けだしそれ等は如何なる意味においても流通過程に入り込まぬからである。

各部門における生産の過程はそれ〴〵 $G<\begin{matrix}P^m\\A\end{matrix}—P—W—G'$ なる表式において示されてゐる。これは單に生産の過程を示すばかりでなく、産業資本が種々に轉形する過程をも示せるものである。

Gは企業家が商品生産のために前拂する貨幣形態の資本を意味する。P^mは生産手段を、Aは勞働力をPは技術的な生産過程を、Wは生産されたる商品を、G′はその商品の販賣によつて獲得されたる貨幣を、gは前拂されたる貨幣Gと回收されたる貨幣G′との差額即ち廣義の利潤を意味する。そこで右の表式は次の如き事實的過程を――理論をではない――を表現してゐるわけである。各企業家が一定額の資本を貨幣形態において前拂し、よつて生産手段と勞働力とを買入れる。この兩者の共働によつて生産過程が遂行せられ、その結果として新たなる商品が作られる、それが販賣されて前拂されたる額よりヨリ大なる貨幣額が回收される。然して企業家の目的とする所は正にこのヨリ大なる貨幣額を、即ち一つの差額gを獲得するにあるといふこと。

右の如き各部門内における生産は封鎖的に自己滿足的に遂行されることはできない、一つの部門の生産は他の部門の生産に倚存する。これが資本主義的經濟の現實である。そのために生ずる各部門間における商品と貨幣との流通が各種の線を以て示されてゐる。このことを說明せねばならぬ。

六

まづ第一部門の生産過程から一定種類の、一定量の商品（W）が生産される。この部門の商品は恐らくは種々雜多のものから成立つてゐるであらう。石炭、棉花、羊毛、木材、馬鈴薯、米、麥等々。それ

等の或ものは直接に終局的消費者の手に渡るであらうが――消費手段市場を通じて――このことを表現するためには圖型を一層複雜のものたらしめねばならぬので、圖型ではこゝでの生產物たる商品は、凡て直接には消費者の手に渡らず、消費者の手に渡るものは凡て第三部門たる消費手段生產部門を媒介とすると前提されてゐる。

この前提の下では、この部門の生產物は――部門內に留保される部分は別であるが――他の二大部門に販賣されねばならぬ。或は第二部門の原料として、或は第三部門の原料若くは取引商品として。即ち第一部門の生產物（W）は二つの路を流れるわけである。その一部は第一部門に流れ込む。圖型では『――①』としてこれが表はされてゐる。この商品の流れに對して、それに照應する貨幣の流れがある。即ち第二部門は前拂せる貨幣額のうち$P_{:n}$の購買に充當せる部分だけを右の原料の價格として、第一部門に與へるのである。この貨幣の流れは『……②』によつて示されてゐる。

第一部門の生產物中の他の一部は、『――②』によつて示された路を流れる。即ちそれは第三部門の生產手段となるのである。この商品の流れに照應して、第三部門によつて前拂される貨幣の一部が『……②』によつて示された路を流れ、第二部門から流入する貨幣と共に、第一部門におけるG'を形成する。

かやうにして、第一部門の生產物は第二及び第三部門に販賣せられると共に、第一部門のG'が、そしてそれと共にGとG'との差額たるgが實現されることになる。

第二部門の生産物も右に述べたところと全く同様にして、第一及び第三部門に販賣せられる。まづこれと第一部門との關係から見やう。第二部門は第一部門にとりて必要な機械、道具等々を提供し、第一部門より、その價格として、この部門が生産手段のために前拂せる貨幣を受け取る。即ち第二部門の生産物は『——』③の線に沿ふて流れ出で、貨幣が『……』③の線に沿ふて第一部から流れ込むのである。——第二部門と第三部門との關係もこれと同じである。即ち第二部門の生産物の他の一部は『——』④の線に沿ふて第三部門に向つて流出し、そこで生産手段として作用する。これに照應して第三部門から前拂された貨幣の一部が『……』④の線に沿ふて流入する。そして第一部門からの貨幣の流れと合流して、第二部門のG′を實現するのである。

第三部門が、第一及び第二部門に對して有つ關係はすでに右の叙述の中に含まれてゐた。然してこれまでの叙述では、第一及び第二部門は共に相互に買手であると共に賣手であつたが、第三部門は常に買手たるのみで、賣手ではなかつた。然しこの第三部門も、その生産物の賣手となり得ないならばG′をしたがつてまた利潤gを實現することはできない。然らば第三部門は何人に對して賣手となり得るか。勿論終局的消費者に對してである。然し消費者は如何にして買手となり得るであらうか。その購買手段たる所得を如何にして獲得するか。

消費者の所得は、販賣される商品と同様に、生産的企業そのものから生ずるのである。かくいふこと

は一見奇異なるが如くであるが、然し眞理たるを失はない。生産的企業活動の中において同時に所得分配が爲されるといふこと、これは正に資本主義經濟の特色の一つである。

さて所得の第一の形態としての勞働所得から考へて見やう。こゝに勞働所得といふとき、非獨主的なる人々、勞働者並に使用人の所得を意味させる。これ等の所得は、企業家の立場からすれば生産物の費用たる部分であり、將來の生産物の價格において回收さるべきものである。また勞働者の立場から見れば、彼等が提供する勞働力の對價である。とにかくこの勞働所得は各部門において前拂されたる貨幣Gの一部から流出するのである。即ちそれは三大部門の資本から流出して貨幣流通の中に入り込み、一部は消費者市場に注ぎ込んで、消費財に對する購買力となり、他の一部は貨幣・資本市場に注ぎ込んで（圖型では『節約所得』とせられてゐる）貸付資本を形成する。圖型で『――――』なる線を以て示されたものがその經路である。

勞働所得と相並んで更に三つの形態の所得が、これまた同じく生産的企業から流出する。即ち地代、資本利子及び企業利潤これである。これ等三形態の所得は右の圖型に示されたやうに、各部門のGとG′との差額たるg即ち廣義の利潤の中にのみその根源を有つ。これ等三形態の所得がG′從つてgが實現せられるまへに、土地所有者、債權者、株主等に前拂されるものであるにしても、このことは、これ等の所得の根源がgにあるといふ事實を覆すものではない。――さてこれ等の所得については三つの使用方

法が可能である。一は自己企業の資本に追加すること、二は貸付けること、三は消費することこれである。自己企業に直接追加される場合にはGがそれだけ膨脹し、膨脹したGが前に述べたと同一の循環を反復することになるが、かゝる用途に向けられた所得は圖型では貨幣の流としては表はれて來ないものとせられてゐる。（これとても一度は貨幣・資本市場に流入するのが常則であるけれども、これは『節約』された所得ではないといふ意味で、圖型では省略したものであらう。）後の二つの用途に向けられる所得は各部門のG′から發する貨幣の流れとして、一部は消費手段市場に流入して、消費財に對する購買力として作用し、こゝに流入する勞働所得と共に第三部門のG′を實現する。他の一部は貨幣・資本市場に流入し、こゝに流入する勞働所得と共に、貸付資本を形成する。圖型では右の三所得を一括して一本の線『┃┆┆┆┆┆┆┆』を以て示してゐる。（貨幣・資本市場に流入して貸付資本を形成するものは、三大部門のいづれかにおいて、貨幣資本Gとして作用すべき運命にあるものとして、この圖型では示されてゐる。）

最後に派生的所得なるものを考へねばならぬ。これは主として自由職業者及び官公吏の所得である。彼等の所得が派生的と言はるゝ所以は、生産的企業から直接に流出するものではなくて、企業から流出する所得をもつて支拂はれるところの所得だからである。例へば人は勞働所得、利子、地代をもつて醫師に支拂ひ、觀劇券を買ふことによつて役者に支拂ひ、租稅を通じて官公吏に支拂ひ、よつてもつて醫

師、役者、官公吏の所得を形成させるのである。これ等の派生的所得の流れは、前述の勞働所得及『利潤』所得と全く同一の經路をとる。

以上の如くにして、三大生産部門の生産物が、それ〴〵その販路を見出すことによつて、生産の目的であるところの利潤が實現され、資本の價値增殖が遂行されるわけである。[8]

上掲の圖型及び右の說明は今日の極めて復雜なる資本主義經濟の事實的過程を殘りなく表現したものではない。最も重要なる信用關係が極めて不充分にしか考慮されてゐないのは最大の缺點である。それにも拘らず、右の圖型は資本主義經濟の基本的關係を明瞭に描き出し、そして利潤獲得を目的とする資本主義的生産が商品及び貨幣の流通を媒介として遂行される根本樣式を示せるものとしては殆んど遺憾なしといふことができるであらう。

尤も右の圖型に關して、社會的生産の諸部門を原始生産、生産手段生産及び消費手段生産の三大部門に分つことについては異說がある。例へばカール・マルクス（Karl Marx）がこれを生産手段生産部門と消費手段生産部門とに分つて考察してゐることは周知の通りである。[9] マルクスの流を汲むものは凡てこの立場をとる。ローザ・ルクゼンブルグ（Rosa Luxenburg）[10] 及びヒルフアディング（Hilferding）[11] の勞作及びそれ等をめぐつて展開された多數のマルクス主義的文獻皆然りである。然し私は思ふ。原始生産とこゝに言へる部門はその一部は生産手段部門に他の一部は消費手段部門に包括せしめ得るであらう

8) Marzel, ibid, S. 20ff. 參照。
9) Marx, Das Kapital, Bd. II.
10) Luxenburg, Die Akkumulation des Kapitales, 1912
11) Hilferding, Das Finanzkapital 1909.

が、然しその本質において自然的條件に依存し、從つて特殊の社會的性質を帶びるこの部門は、これを一個獨立の部門として考へることが、ヨリ妥當である。然かも資本主義經濟の基本關係を大觀する今この部門を獨立の部門として引き入れ、他の部門との相互關係を確めておくことは、農業における景氣變動を考察する場合の立場を豫め作つておくことであつて、合目的的でもある。

他方ではまたツガン・バラノフスキー及びシュピートホーフは、[12] 生產手段生產部門、勞働者用消費手段生產部門及び資本家用消費手段生產部門の三大部門に分つて考察してゐる。消費手段生產部門をかく二つの獨立の部門に分つことは、所謂節約或は蓄積の効果を檢する上において意義を有つことではあるが、然し蓄積の効果はかく資本家用消費財生產部門を獨立の部門として定立せずとも明確にされ得る。のみならず、かく區分することは、資本主義的生產において、消費手段生產部門の占むる意義を過大に印象づける危險があるので、私はとらない。——またレーデラー（E. Lederer）は、まづ生產財生產部門と完成財生產部門とに二大別し、次いで前者を更に使用されたる生產財を代置するための生產部門と追加的生產財の生產部門とに分ち、また後者をツガンと同樣、資本家用消費財生產部門と、勞働者用消費財生產部門とに分つてゐる。[13] 然しかやうに細分することは、寧ろ基本關係の大觀を紛淆せしめるだけの効果しかないと思ふ。

七

12) Spiethoff, Der Kapitalmangel in seiner Verhältnis zur Güterwelt. (Schmollers Jahrbuch, Bd. 33, 1909).
13) Lederer, Konjunktur und Krise. G. d. S. Bd. IV. S. 371

さて以上によつて、資本主義生産が、如何なる關係の下で、また如何なる樣式によつて遂行されるかを理解し得た吾々は、資本主義的生産が然かもその擴大再生産が、何等の障害も受けずに圓滑に進行し得るための諸條件はなんであるかを、即ち吾々が問題とせねばならぬ均衡はなんであるかを、明かにすることができるであらう。

擴大再生産が圓滑に行はれための第一の條件は生産手段の生産流通に關してゐる。

まづ生産手段のうち原料及び補助原料たる性質をもつ第一部門の生産物について見やう。その一部分はこの部門で使用されるであらう、その量は前年度と同量プラス擴大再生産のための追加量である。これは部門間の流通には現はれぬ部分である。他の一部は、第二及び第三部門において使用さるべきもの、その量は前年度の使用量プラス擴大再生産のための追加量である。これは第二及び第三部門の本來的資本並びに追加資本によつて購買されることを要する部分である。——次ぎに生産手段のうち、固定資本たるべき性質をもつ、第二部門の生産物について見やう、これも前者と同樣に、第二部門の固定資本の消耗部分の補塡並びに追加固定資本として用ひらるゝ部分は、流通界には現はれない。流通界に現はるゝ部分は第一及び、第三部門の消耗固定資本の補塡及び追加固定資本として用ひらるべき部分であつて、これ等はいふまでもなく、第一及び、第三部門の本來的資本並びに追加資本によつて購買さるゝことを要するものである。

ところが幾許の生産手段（原料及び固定資本）が第一及び、第二部門において生産され、またその幾許が三つの部門において購買され得るかといふことは、各部門の相對的發展の程度によつて決定されることである。そして各部門の相對的發展の程度は社會的總資本（本來的なる並びに蓄積されたる）の各部門への配分によつて測定せられる。そこで擴大再生産が、圓滑に進行するための第一の條件としては、流通界に現はるべき生産手段が殘りなく販賣され得るやうに、三つの生産部門が發展する、或は同じことであるが、社會的總資本が然るやうに配分されるといふことが考へられる。そして生産の各部門が右の條件を充たすやうに發展すること、これを吾々は生産諸部門間の均衡と呼ぶことができる。またこれを、資本主義的均衡の基本形態と見ることができる。生産手段の生産、流通に、然して生産部門間の右の如き均衡に重點を置き、それを基本的なるものと考へるのは何故かといふに、それは、資本主義的經濟が發展するに從つて、社會的總生産において、生産手段の生産が占むる比率がます〳〵大となつて來るからに他ならぬ。然しこの點は別に詳論の機會を有かねばならぬ。

吾々が想定する擴張再生産の第一條件、したがつて、また均衡の基本形態は右の如くであるが、然しそれは勿論、完全にして充分なる條件でもなければ、また自己充足的な均衡でもないことを注意せねばならぬ。この條件は二つの補足的な條件を伴ふことによつて、はじめて完全にして、充分なる條件となり得るし、また均衡のこの基本形態は二つの意味の均衡を内包することによつて、自己充足的な均衡と

なり得るのである。

補足的條件の第一は、生産されたる消費手段の流通に關してゐる。消費手段生産部門が第一及び第二部門から生産手段（原料及び固定資本）を購買するのは、よつて以つて生産される消費手段を販賣しG′を實現せんがために他ならぬのであるから、第三部門に賣らるべき、第一及び第二部門の生産物が販賣されるといふことは、消費手段の販賣が可能であるといふ條件に制約されるわけである。――他方消費手段に對する購買力は一切の形態の所得によつて代表せられ、然かもこれ等の所得は、さきに見たやうに、三つの部門における生産企業から、直接間接に流出するものであるから、消費手段の販賣が可能であるか、どうかは、各部門の生産の發展に依存することである。そこで吾々は次ぎのやうにいふことができる、消費手段の販賣が可能であるか、どうかは、生産手段の販賣が可能であるかどうかを決定する條件であると共に、各部門の生産的活動は消費手段の販賣可能の條件たるものである、と。

右の考察から、さきの均衡の基本形態が重要な補足を受けねばならぬことも明かであらう。即ち吾々は流通界に投ぜらるゝ生産手段が販賣しつくされるやうに、生産の三部門が發展することを、均衡の基本形態と考へるのであるが、いまこの見解を補足して、流通に投ぜらるゝ消費手段もまた販賣しつくされるやうに、三部門が發展することといふ條件を附加せねばならぬ。然しこの條件は、社會的總資本の三部門への配分の問題に直接關はつてゐるものではなくて、直接には所得形成の問題に關はつてゐるの

である。然かも、所得の形成は、資本の配分による生産の發展によつて、決定されるものであるが故に、この所得形成にかかはる消費手段の供給と需要との均衡を、均衡の基本形態の第一の補足形態と見るのである。均衡のこの補足形態は、基本的形態と無關係に、その外部から附加されるものではなしにそれと有機的な關係を保つものであり、その不可缺なる一部であり、これなくしては、基本形態そのものが、完全ではあり得ない性質のものであること、上述するところによつて、すでに明白であらう。

擴張再生産の基本的條件に對する補足條件の第二は、貨幣・資本市場の形成に關してゐる。貨幣・資本市場は今日の經濟においては極めて複雜なる構成をもつてゐる。特殊の領域としての證券市場の發達追加信用の成立等々はそれをます〳〵複雜化させてゐる。これ等の點に關聯して尙ほ考ふべき均衡の諸條件が存在するのであるが、このことは、尙ほ後段において詳論することとし、こゝでは次の點を指摘するに止めやう。吾々は均衡の第一補足形態を考へるにあたつて、あらゆる形態の所得が、全部消費手段市場に注入するものと前提したのであるが、いまこの前提を取去り、所得は消費手段市場と貨幣・資本市場とに分注するといふ現實的關係に立脚すると、この兩市場へ分注する所得の流れが、一定の比率を保つことが、再生産の圓滑なる進行のために必要なる條件であることが明かである。即ち所得の流れのうち、消費手段市場に注入する部分は、恰かも第三部門の生産費（生産手段の價格、及び勞賃）プラス利潤（地代、利子、企業利潤）即ちG′を實現するに充分なる額であり、そして貨幣・資本市場に注入

して貸付資本を形成する部分が恰かも三大生産部門の追加的資本需要に照應するといふ風に、所得が分流することが必要なる條件であることになる。然かもこの條件はさきの基本的條件及び第一の補足的條件と不可分の倚存關係にあること更めて絮說するまでもないであらう。この第二の補足的條件が充たされることを、均衡の第二補足形態が成立してゐると稱する。これが均衡の基本形態に對してもつ意義は、第一補足形態がそれに對してもつ意義と全然同一である。

私はさきに資本主義經濟の基本關係において想定すべき均衡は一般的均衡でなければならぬといつておいた。その一般的均衡なるものは、生産諸部門間に成立すべき基本的形態の均衡を中心とし、消費手段の生産と消費との間に、及び所得の蓄積（節約）と支出との間に成立すべき二つの補足的形態の均衡を兩翼とする均衡なのである。そして基本的均衡はその兩翼となる補足的な均衡なくしては安定的ではあり得ないのであるから、一般的均衡は即ち右の三形態の均衡の有機的全體であると言つてよい。

八

擴張再生産が圓滑に進行するためには、右の如き一般的均衡が成立することが必要である。このことは思惟必然的に要請されることであると同時に、資本主義的擴張再生産の現實的行程の要請でもある。然るに資本主義的經濟の現實は、他方において、この一般的均衡の成立を不可能にしてゐる。如何な

る發展段階においても、この一般的均衡は實現されない。したがつて擴張再生産の圓滑なる進行は常に不可能である。それは常に不安定的な、動搖的な、即ち景氣變動の形式において、進行せざるを得ない。圓滑な、漸次的な、持續的な進行形式をとるを得ないで、攪亂的な、飛躍的な、斷續的な進行形式をとらざるを得ないことになる。

私はこのやうにして景氣變動の必然性を論證し得ると考へる。そこで私にとりての次の課題は、一般的均衡の成立を不可能にするところの事情は何であるか、これを明かにすることである。

一般的均衡の成立を不可能にする事情は、資本主義的組織そのものゝ中に與へられてゐる。いふまでもなく、資本主義的組織は、資本の私有を基礎とし、自由競爭を樞軸とし、利潤の獲得（資本の價値增殖）を目的として構成されてゐるものである。換言すれば、資本は自己增殖をその使命とする價値である。それは個々人の私有に屬してをり、また資本增殖のための基本組織としての企業もまた個々獨立の存在を保つてゐる以上、資本間の、また企業間の、競爭は不可避的であることになつてゐる。これ等が資本主義組織の諸原理である。

かゝる諸原理に立脚する資本主義的組織において、さきに述べた如き一般的均衡が成立し得ない所以は殆んど自明的であると思はれるが、然し若干の考察を加へておかう。

さきにも一言したやうに、資本は價値增殖をなすべき價値である。それは利潤（廣義の）を生まなけ

れば、資本たる性質を失ふ。即ち資本にとつては利潤の獲得がその絶對命令として課せられてゐる。然して利潤の獲得は、本來的には、生産的企業を通じて行はれるものであるから、生産的企業は不斷に無限發展への傾向を孕んでゐる。ツガン・バラノフスキーが資本主義經濟においては、資本の蓄積が自己目的であり、これが不斷の生産擴張に導く、[14] と言つてゐるのはこの意味において正當である。またヒルファディングが、資本家の生産は慾望充足のためではなくて利潤のためである。利潤の實現と增加とは實に資本主義生産の內在的目的である、[13] と言つてゐるのも同じ意味である。然るにこの利潤の獲得は三大生産部門のいづれかにおいて爲されるより他はないが、これ等の諸部門が一般的均衡を實現するやうに排列されるといふ保證は何處にも存在しない。その排列を規律するものとしては價格及び利潤率あるのみである。然しこれ等の力も一般的均衡を近似的に成立させるにすぎず、またそれを成立させる過程においても(勞働及び資本の移動を通じての)幾多の摩擦を作り出さざるを得ない。殊に自然的條件に制約されること多き第一部門の生産、殊に有機的產業を考慮に入れて來ると、價格及び利潤率がもつ規制力は甚だしくその偉力を失ふこと明かである。例へば一つの有機的原料に對する需要が高まり、その價格の騰貴、從つて農業部門における特別利潤の發生があれば、その部門に多額の資本が流入し得るであらうが、それが第二及び第三部門にとりて必要な原料を提供し得るまでには、長い年月が必要であり、その間は一般的均衡は近似的にすら實現されることはできぬであらう。要するに生産は無限に發展擴大

14) Tugan-Baranowsky,邦譯、鏡本博、英國恐慌史論二四八頁。
15) Hilferding, Das Finanzkapital S. 298. 邦譯、林要、四八四頁。

する傾向を孕んでゐるが、一般的均衡確保の樣式において發展擴大することの保證はない。

第二に、右の如く資本はその本質上生產の無限的發展を要求するものである上に、更らに競爭の法則がこの要求に拍車を加へる。即ち企業間の競爭における最大の武器は各企業の生產力の發展であるが、この生產力の發展は產業用の大機械の新たなる改善を通じて行はれる。換言すればその機械（固定資本）の改善を怠る企業家は、競爭において沒落するの他はないのである。然かもこのことが一般的不均衡を深化する要因として働く。けだしシスモンディ（Sismondi）が、すでに十九世紀の初頭に指摘したやうに、機械の採用は少數の機械勞働者による多數の手工勞働者の追放、人間勞働力を不用ならしめること（過剩人口の創造）に他ならぬが、かゝる機械がます〳〵改善されるときには、遂には機械勞働者の多數までも追放されることになる、然して、勞働者の追放、過剩人口の增加は社會の消費能力即ち消費手段購買力の減少に他ならず、然かもかゝる事態を惹起したと同一の原因が他方において社會の生產力を絕對的に增大せしめつゝあるからである。

第三に價値增殖を使命とする資本は、資本の所有者に、資本の蓄積（所謂節約）を强制的に命令する。マルサス（T, R, Malthus）の言葉を借れば資本家は『蓄積の情熱』（Passion for accumulation）を有たざるを得ない。[16] 當時の理論家ジェームス・ミル（Janes Mill）は販賣と購買との同一性を主張した、即ち賣ることは買ふことであり、買ふことは即ち賣ることであるとの見地から、生產と消費との均衡を力

16) Malthus, Principles of Political Economy, 1820,2nd. ed. 1836. p. 365.

說したが[17]、これは蓄積の情熱を無視した謬論である。勿論人は何人かゞ買はねば賣ることはできぬ、然し賣つたからとて買はねばならぬ必要はない。即ち商品販賣によつて實現し得た利潤はこれを消費市場に注ぎ込んで消費力として發現させることなく、これを蓄積することが可能である。然もそれは單に可能であるばかりでなく、資本の命令である。かくて蓄積の情熱が强力となればなるほど、社會の生產力と消費力との不一致、從つて一般的不均衡は一層甚しくならざるを得ない。——尤も蓄積されたる所得も、資本として貸出されるものであるが故に、蓄積によつては社會の購買力は減少しないといふ見解がある。(例へばリカアド)。かゝる見解に對しては後段において批評を加へやうと思ふ。

之を要するに、資本主義的經濟においては諸々の私的企業が資本の增殖を目指して無統制な、無政府的な競爭關係に立つてゐるといふ事實が、一般的均衡の成立を不可能ならしめ、景氣變動を必然的ならしめるのである。

九

以上述べたところによつて景氣變動の必然性に關する私の見解の根本樣相だけは盡くし得たと思ふ。私は進んでさきに留保した問題、貨幣・資本市場即ち信用の問題に立ち入つて論じなければ、私の所論は完結しない。今日の經濟は『信用』經濟と規定される程に信用の關係はあらゆる部面に入り込んでゐ

17) Mill, Commerce Defended. etc. 1303, p. 81ff.

る。それは單に貨幣・資本市場の問題たるばかりでなく、生産・流通部面の問題でもあるから、信用關係に着目する一般的不均衡性の必然性を論證せねばならぬ。

然し私はいましばらくこの問題を留保し、こゝに諸學者の見解を簡單に批判的に檢討することによつて、上述の一般的不均衡說を側面から照射すると共に、叙述上意を盡さなかつた諸點を補ひたいと思ふ。

從來の景氣理論家の多くが、景氣變動の必然性を論證するために想定した均衡は部分的均衡のみであつて、吾々の言ふ一般的均衡ではなかつた。即ち或は單なる生産と終局的消費との均衡、或は單なる生産部門間の均衡のみに着目したのである。

例へば現代の恐慌現象について最初の鋭いメスを加へたシスモンディの理論は、生産と終局的消費との均衡論に立脚するものである。シスモンディは、終局的消費は勞賃、利潤及び地代なる三形態の所得によつて決定される。[18] したがつて社會の生産は社會の所得の大いさに照應し、それによつて全部吸收されるやうに遂行されねばならぬと確信する。[19] さうあることによつてはじめて再生産が圓滑に進行し得る。これに反して『生産が通常以下の所得を生み出しても、或は資本の一部が消費基金に移されても、或は反對に消費が減少して新たなる生産への刺戟を與へないでも、いづれの場合にも同樣に有害である。』[20] 然るに今日の『商業制度』(資本主義制度)の下においては、殊に『生産が通常以上の所得を生み

18) Sismondi, Noureaux Principes; Deutsch, S. 65
19) Sismondi, ibid. S. 88ff.
20) Sismondi, ibid. S. 95.

出す』可能性が與へられてゐることを、資本家間の競爭に基く機械の採用なる事實によつて彼は明快に說いてゐる。この點に彼の沒すべからざる貢獻がある。即ち彼は言つてゐる。『一人の製造業者はヨリ安く賣る場合にヨリ多くを賣るであらう、他人がヨリ少くしか賣らないであらうから。そこで製造業者の注意は、不斷に、勞働の節約或は素材の節約をして他人よりもヨリ安く賣る地位に立つことに向けられてゐる。然るに素材なるものはこれ前行勞働の果實であるから、彼の節約は結局等しい生產物にヨリ少量の勞働を費すことに歸着する。彼が一つの新工場を延て、新たなる作業方法を移入するために……、勞働を用ひるとすれば……、これは依て以て通常勞働を甚だしく減少させ、將來は……曾て十人の男子が爲したことを一人の子供が爲し遂げ得るやうにし得ることを確信してゐるからに他ならぬ。……その結果はどうなるか。誰れかゞ彼の勞働者を解雇せねばならぬ、然かも機械が勞働の生產力を高めたその割合だけ解雇せねばならぬ。』[21] かくして彼は所謂機械補償說を決定的に反駁したのである。

以上見たかぎりのシスモンデイの所論には誤謬はないであらう。けれどもこれだけでは景氣變動の必然性を明かにすることはできない。なぜなら、彼においては擴大再生產が、看過されており、（所得は全部消費ざれるものと前提されてゐる）生產手段の生產したがつて資本によるその購買が充分に理解されておらず、したがつてまた恐慌の周期性、或は同じことであるが、恐慌には常に好景氣が前行することが、理解され得ないからである。

21) Sismondi, ibid. S. 264—265.

シスモンディが生産を終極的消費と對立させ、兩者間の均衡の必要を力說したに反して、彼に反對せる一群の調和論者は、生産を生産と對立させこの間の均衡を力說するに努めた。即ち調和論者の着目したものは、吾々の言葉で云へば生産部門間の均衡であつたのである。

調和論者の代表的なるものとしてはセイ、ミル、リカアドを擧げることができる。セイの所謂『販路說』なるものはマルサス宛の一書簡において簡潔に述べられてゐる。『アダム・スミス以來政治經濟學の研究に携はつた人は何人でも、次のことを認める、即ち吾々は、嚴密に言へば、吾々の欲望充足手段を流通用具たる貨幣によつて現實に購買し、貨幣をもつて支拂ふものではないといふこと、を。吾々は第一にこの貨幣自體を、吾々自身の生産物の販賣によつて買取つてゐなければならぬ。一人の鑛山所有者にとつては銀は生産物である、彼はそれをもつて必要とする財を購買する。後にこの銀をその手に握つた凡てのものにとつては、その銀は、彼等が自己の土地、營利資本及び彼等の勞働の助力によつて産出した財の價格に他ならぬ。彼等は販賣に際してその財を貨幣と交換するのである、然る後その貨幣によつて消費手段を購買するのだ。即ち彼等は、根本においては、彼等の生産物をもつて買ふのである。……かくの如き前提命題から……次の如き命題を導出することができる。……吾々は誰れでも、他人の生産物を、吾々自身の生産物をもつてのみ購買し得るのであるから、即ち吾々が購買し得るところの價値量は、吾々が生産し得るところのにそれ等しいのだから、それ故人々は彼等が生産するところ大なれば大

なるほどヨリ多くを購買するであらう。したがつてかうなる……、若干の商品が販賣され得ない理由は他の商品が生産されないところにある。生産のみが生産物に對して販路を開くのである。[22]』

同樣の見解が、ジエームス・ミルによつて次の如く表現されてゐる。『商品が市場に運ばれるときには、必要なることは何人かゞ購買せんとしてゐることである、けれども購買するためには、人はいづれにせよ支拂はねばならぬ。それ故に、一國民の全市場を構成するものは、全國民の中に存在してゐる支拂手段の總體であることは明白だ。だが全國民の支拂手段の總體は何處に存在してゐるか。それはその年生産物の中に、その住民の全體の年所得の中に、存在するのではないか。果して國民の購買力が——確かにさうであるが——その年生産物によつて正確に測定されるとするならば、年生産物が增加すること大なれば大なる程、そのこと自體によつて、國民的市場が、國民の購買力のみならずその現實的購買が、擴大するのである。即ち或時或國で創造される商品の追加量が如何にあらうとも、それと等しい追加購買力が同時に創造されてゐるのである。それ故に一國民は、當然に、資本或は商品の過剩に苦しむことはない。けだし資本の作用そのものが、その生産物に對する販路を作るからだ。[23]』

このやうなセイ・ミル的販路說に對しては種々なる點から批評が下され得るであらう。例へば彼等は貨幣を單に商品交換の媒介手段としてのみ考へ、それを資本として、また蓄積手段として考察しなかつたこと、したがつて販賣は必然的に購買を條件づけると考へたこと。或は信用の關係を全然無視して販

22) Say, Briefe an Malthus,-Diehl u. Mombert, Ausgewählte Lesestück Bd. VII, S. 54.
23) J. Mill, Commerce Defended, pp. 81—82.

賣と購買とを常に直接的に對立させて考へてゐること。また、生産を資本主義的生産としてゞはなしに獨立生産者の生産として考へたこと、したがつて交換を獨立生産者間の交換としてのみ理解し、資本主義的分配關係について無理解であつたこと。かうした重大な諸欠陷を包藏するものであることが指摘され得るであらう。

それにも拘らず、『生産のみが生産物に對して販路を開く』（セイ）とか、『資本の作用そのものがその生産物に對する販路を作る』（ミル）といふ見解の中には重要な眞理の萠芽が含まれてゐる。生産を單に終局的消費とのみ對立させて考へるシスモンヂその他の過少消費說或は購買力說なるものが看過した一面の眞理の萠芽が含まれてゐるのである。その眞理の萠芽がどのやうな意味のものであるかは、吾々がさきに揭げた貨幣及び商品流通の圖型を想起すれば明白であらう。吾々はそこで、一部門の生産物殊に生産手段たる生産物が、どれだけ需要されどれだけ購買されるかは、他の部門の生産がどれだけ發展するかによつて定まることを理解したはづである。セイ・ミルの見解はこの點に着目せるものとして充分に高く評價されねばならぬ。たゞ彼等は生産の資本主義性を明確に認識しなかつたが爲めに、この所謂生産部門間の均衡を充分なる、自己充足的なる均衡として理解するの誤謬に陷つたのである。この誤謬はシスモンデイ的見解によつて匡正され得る。このことを吾々は均衡の基本形態（生産部門間の均衡）は、均衡の第一補足形態をその不可缺なる一翼として有たねばならぬと論じておいた。それはとに

かく、吾々の云ふ均衡の基本形態が、一般的恐慌肯定論者によつてゞはなく、その否定論者によつて、はじめて指摘されたことは歴史の皮肉でもあらうか。

以上の諸理論家においては、利潤の節約即ち資本蓄積の問題は明確に取上げられてゐない。リカアドが、これを取上げて次のやうに論じたのである。『或人がまだ滿たされざる欲望を有するかぎり、その人はヨリ多くの商品に對する需要を有するであらう。……若し年收十萬磅なる人に一萬磅が與へられるならば、彼はこれを庫中に閉鎖することはせずして、その支出に一萬磅を追加するか、自からこれを生産的に使用するか、或は生産的に使用させるために他人に貸付けるかするであらう。いづれの場合においても、需要の目的物は異つても兎に角需要は增加するであらう。若しこの人がその支出に追加するならば、彼の有効需要は恐くは建物、家具又は何等かこの種の享樂財に向ふであらう。若しこの人がその一萬磅を生産的に使用するならば、その有効需要は、新たなる勞働者を勞働に就かしめるための食物、衣服及び原料に向ふであらう。而かもそれは尙ほ需要たることを失はぬであらう。』[24]

追加所得が終局的消費のために支出されるにせよ、また追加資本として投下されるにせよ、異れる對象に對する需要ではあるが、需要としては變りはないといふ右のリカアドの見解は誤謬である。終極的消費のために支出される場合には、それはそれだけの消費財を終極的に流通界から取去るに反して、追加資本として支出される場合には、一應消費財及び生産財を流通から取去るけれども、そのうちの生産

24) Ricardo, Principles of Political Economy, ed. Gonner, pp. 274--275.

財は潜在的商品供給力として殘るからである。また追加資本として投下せられる場合においても、それがヨリ多く機械、原料等の購買に振向けらるゝか、ヨリ多く勞働雇傭に振向けらるゝかにしたがつて、その齎らす効果は決して同一ではないであらう。――要するにリカアドはこゝで吾々の云ふ均衡の第二の補足形態の成立可能を論じたわけであるが、右の理由によつて吾々はその不可能を主張せざるを得ない。

この點を指摘したものにマルサスがある。マルサスは右に引用したリカアドの所說を援用したる後、その誤謬であることを指摘して次の如く言つてゐる。――例へばこゝに一群の農夫と一群の製造業者とがあるとする、彼等が、相互に農產物及贅澤品を消費する間は何等の障害も起らぬであらうが、そのいづれかゞ將來のために蓄積しはじめるや否や、相手方の商品に對する需要は直ちに減ぜざるを得ないであらう。[25] こゝではマルサスはセイ・ミル的獨立生產者の物々交換の世界を前提として、節約が擾亂的原因であることを說いてゐるに止まるが、彼は他の箇所では資本主義經濟の前提の上に立つて、同じ事柄を次の如く說いてゐる。曰く、『節約によつて資本の蓄積が爲されるせよ、さうすれば不生產的勞働者が生產的勞働者に轉化されるであらう。生產的勞働者の增加によつて、供給される商品の數量は增加する。だがこの增加せる商品量は、利潤を無に歸せしめ且つ再生產の進行を阻止する程に下落せる價格を以てゞなければ購買者を見出すことはできぬ。これ即ち過剩生產そのものに他ならぬ』[26] と。私の見る所とは

25) Malthus, Principles. p 363.
26) Malthus, ibid. p. 352. 354.

必ずしも同一ではないが、リカアドに對する批判たるかぎりにおいては正當である。

一〇

かやうに古典學派の理論家たちはそれ〴〵部分的均衡に着目したにすぎず、反對說の有つ意義を適當に評價し、それを包攝して自己の理論體系をヨリ高き立場において建設することができなかつた。轉じて近代の景氣理論家の所說を見るに、その一面的なる點においては、古典學派の理論家と殆ど擇ぶところなしと言ふも過言ではなく、また、古典學派の諸理論をそれ〴〵好むところに從つて細目的に加工したにすぎぬといふも酷評ではないであらう。

例へばシスモンデイの生產と終局的消費との不均衡說は、ロードベルツス（Rodbertus）デューリング（Dühring）ホブソン（Hobson）等々を經て、レーデラー（Lederer）においてその最高の代表者を見出してゐるが、このレーデラーは生產部門間の不均衡の意義を明確に否定し、生產と所得との不均衡のみを以つて景氣變動の必然性を說く。彼が景氣理論にとりて生產部門間の不均衡——彼自身の用語では不比例性（Disproportionalität）——の意義を否定するのは、經濟體には『彈力性』があるが故に、かゝる不比例性は『急速且つ容易に』排除され得ると考へるからである。[27] 謂ふ所の經濟體の彈力性は、資本及び勞働の自由移動、勞働の機械化、信用の作用によつて與へられるものであつて、これ等が、生產部門間

27) Lederer, ibid. S. 372.

の不比例性を平準化するといふのである。これは根本においてリカアド的『自然價格』實現理論の複寫にすぎぬ。また生産部門間の不比例性――不均衡――を、それ自身獨自のものとして理解し、生産部門間の不均衡が同時に生産と消費との不均衡を內包するものなることを理解せざる點においても、リカアド殊にセイ・ミル的見解の誤謬を踏襲せるものと言はねばならぬ。

然してレーデラーの景氣變動必然論は次の一命題の中に簡潔に表現されてゐる。曰く、『生産の發展と所得の發展……との矛盾、これのみが一般的な恐慌とその規則的な出現とを說明し得るものである。』[28]と。これは言ふまでもなくシスモンデイ的見解である。そしてレーデラーもまた、社會の總生産物のうち、所得によつて購買さるべき生産物（消費財）價値量が、資本によつて購買さるべき生産物（生産財）價値量に比して、如何に少額なものであるかといふこと、したがつて生産の發展そのものが、即ち資本の投下が生産物の流通にとりて如何に大なる意義を有するかといふことを、全く看過するの誤謬を冒してゐる。この點では彼はセイ・ミル的見解に含まれた眞理の萠芽を蹂躪し去つてゐるわけである。

レーデラー流の消費重視の思想に對立して、セイ・ミル的生産重視の思想を有つ一群の理論家がある。これが現代景氣理論界においてヨリ有力に主張されつゝある。シユピートホーフ、カツセル等もこの系統に屬するものであるが、理論的代表者としてツガン・バラノフスキーとヒルフアデイングとを擧げることができやう。

23) Lederer, idid. S. 386.

ツガン・バラノフスキーは、次のやうに主張してゐる。曰く、『資本主義經濟においては、商品に對する需要は、社會的消費(終局的消費)の全體の大いさとは或る意味において關係はない。社會的消費の全體の大いさは減退しつゝ、同時に商品に對する社會の需要全體の大いさは增大することがあり得る。社會的資本の蓄積は、消費手段に對する社會的需要の制限と同時に商品に對する社會的總需要の高上とに導く。』[29] 換言すれば、『資本主義經濟における商品に對する需要の範圍は、消費の範圍によつては決定されない。消費ではなしに生產が、資本主義經濟における決定的要因である。』[30] 『技術の進步は、勞働手段や機械の重要さが生きた勞働即ち勞働者自身に比して、ます〳〵增加して行くことに現はれて來る。生產手段は、生產行程においてもまた商品市場においても、ます〳〵大きな役割を演ずる。勞働者は機械に比してその重要さを減じ、そして同時に勞働者の消費から生ずる需要は、生產手段の生產的消費より生ずる需要に比して重要さを減ずる。資本主義的經濟の凡ての機構は、恰かもそれ自身のために存立してゐる機構の如き性質を有ち、その機構の中においては、人間の爲す消費は、再生產の行程や資本流通の行程の單なる要素として現はれる。』[31]

ヒルフアディングもツガンと同一の理論をとる。彼は言つてゐる。『生產が專ら正當なる比例において行はれる場合には、如何にしてかゝることが(社會がその生產するよりもヨリ少く消費するといふことが)可能であるかは理解さるべくもない。總生產物は不變資本(c)プラス可變資本(v)プラス剩餘

29) Tugan, Studien, S. 25
30) Tugan, idid. S. 26
31) Tugan, ibid. S. 27

價値（m）すなはち（c＋v＋m）に等しく、そしてvとmは消費され、消耗された不變資本要素は互に置換へられねばならぬから、そこで生産は、商品の過剰生産に導くことにし、換言すれば、消費され得るよりもヨリ多くの商品が……從てヨリ多くの財貨が、生産されるてふことなしに、無限に擴張され得るわけである。[32]』

これ等の理論は言ふまでもなく極めて重要な眞理を含んでゐる。それは吾々がさきに均衡の基本形態として論じた點を極めて明快に指摘せるものである。然し乍ら均衡の基本形態（生産部門間の均衡）を自己充足的均衡として考へることは誤謬である。成るほど資本主義が發達するに伴ふて、『勞働者は機械に比してその重要さを減じ、そして同時に勞働者の消費から生ずる需要は、生産手段の生産的消費から生ずる需要に比してその重要さを減ずる』（ツガン・バラノフスキー）といふ認識は正しい。例へば紡績業の發展は機械工業の擴大に導き、それはまたそれで鐵に對する需要を喚起し、製鐵工業を刺戟する、また製鐵工業の發展は反射的に機械工業に對して彥大な市場を構成するし、進んではこれ等の部門に使用される勞働者數の增加、賃銀支拂高の相對的增加は、紡績業のために市場を作り出す、といふ風にして、生産部門は相互に販路を提供し合ふのである。然し乍らそれだからと言つて、『資本主義經經においては、商品に對する需要は、社會的消費の全體の大いさとは或る意味において關係はない』（ツガン・バラノフスキー）それ故に、『生産が專ら正當なる比例において行はれさへすれば』『生産は無限に擴張

32) Hilferding, ibid. S. 300. 邦譯四八六頁。

され得る』（ヒルフアデイング）と斷ずることは誤謬である。何ぜなら生産手段は結局においては消費手段生産のための手段に他ならぬのであるから、即ち、生産手段の生産擴大はいづれかの點において消費手段の供給增加となつて現はれざるを得ないのであるから、消費手段に對する需要が、絶對的に增加することがないならば、生産手段の生産は重大な障害を受けざるを得ないからである。『社會的消費』が比例的に增大することがなければ、結局用ひられざる生産手段の累積が、したがつて生産手段生産の停止が、起らざるを得ないであらう。だから吾々は主張せざるを得ない、生産部門間の均衡は基本的意味を有つものではあるけれども、それだけでは充分ではない、それは他方において生産と社會的消費との均衡を伴はなくてはならぬ、或は寧ろ、生産部門間の均衡といふ場合生産と消費との均衡が、內包されてゐなければならぬ、と。

最後にマルサスの流を汲んで、消費的支出と節約（及び投資）の關係に均衡の主要形態を求めてゐるものにケインズ（J. M. Keynes）がある。彼の見解は言ふまでもその大著『貨幣論』（Treaties on Money）に詳細に展開されてゐるが、彼自身これを要約し、『本質的眞理』を含むものとして述べてゐる所によつてこれを覗はう。[33] 彼は言ふ。『先づ販賣のために市場に提供される消費財をとつて考へやう。かゝる財の生産者の利潤（或は損失）は何に倚存するか。總生産費——これは他の視角から見た社會の總利得（earning）と同一のものである——は、一定の割合で消費財生産費と資本財生産費とに分割される。公衆

33) Keynes, The Great Slump of 1930. (Eessays in Persuation, 1933. pp. 135ff.)

の所得（income）――これはまた社會の總利得と同一物である――は、これまた一定の割合で消費財購買のための支出と、節約（saving）とに分たれる。さて第一の割合が、第二の割合よりも大きいときには、消費財生産者は貨幣を失ふであらう、けだし公衆が、消費財購買に支出する額に等しいところの彼等の賣上金は、それ等の財の生産に費へたところのものよりも……小であるからだ。これに反して第二の割合の方が、第一の割合よりも大きいときには、消費財生産者は意外の利益を得るのであらう。そこでかうなる、消費財生産者の利潤は、公衆が、その所得を消費財に支出する割合が大なること（即ちヨリ少く節約すること）によるか、若くは、生産のヨリ大なる割合が資本財の形をとる（このことは、消費財の産出高が比較的に小となることを意味する）ことによるか、によつてのみ回復される。ところが、資本財は、資本財の生産者が利潤を得ることがなければ大規模に生産されないであらう。そこで吾々は第二の問題即ち資本財生産者の利潤は何に倚存するかの問題を取上げねばならぬ。それは、公衆がその節約を貨幣或はこの等價物の形において流動的に保持しやうとするか、或はそれを資本財或はその等價物を購買するために使用せんとするかに倚存する。若しも公衆が、後者を購買することを嫌ふならば、資本財生産者は損失するであらう。したがつてヨリ少くの資本財が生産されるであらう、その結果は上述の理由により、消費財生産者もまた損失を蒙るであらう。換言すれば、生産者の全階級が損失することになるであらう、そして一般的失業が惹起されるであらう。』[34]

34) Keynes, The Great Slump, ibid. pp. 141—143.

要するにケインズの見解は、消費財生産費が所得中消費財に支出される部分に等しく、生産財生産費が節約所得中資本財及びその等價物購買に支出される部分（即ち即ち投資部分）に等しいことが、『生産、交換及び消費の正常的循環』[35]の姿であり、このことが必要なる均衡であるといふのである。彼の所論には批判すべき多くの點があるがこゝではそれに一一觸れることはできない。たゞ次の點を指摘しておけば足るであらう。社會的總所得を消費財並に生産財の生産費に等しいものと見てゐることは、原料及び固定資本の有つ意義を全然看過したものであること。第二に均衡の成否を消費的公衆が所得の支出を如何に配分するかについての態度のみに倚存せしめ、所得支出の配分の如何によつて消費財並に生産財の生産規模が規律せられると見てゐることは、（ハイエークの生産の長期化及び短期化の理論がこれと同一の見解に立つものであることはこゝに注意しておいてよからう）[36]所得それ自體が生産によつて規定されるといふヨリ根本的な關係を看過したものであること。然してこの二點は、ケインズが、吾々の謂ふ均衡の基本形態に想到しなかつたことゝ關聯するものであること、更めて指摘するまでもないであらう。

（未完、次號完結）

35) Keynes, ibid. p. 140
36) Hayek, Preise und Produktion.